

ポップ吉村と直江しやん

里帰り

1955年（昭和30年）、米兵の仲間と1泊旅行に出かけたときの1枚。直江さんの白いパンツとワンピースが華やかだ。車は借り物。このとき子供たちは祖父母と留守番だった。



YOSHIMURA GOD MOTHER'S HISTORY

ヨシムラ三代、苦難の道を乗り越えて

他界して22年経った今も、2輪レース界に強烈な存在感を残す“ポップ吉村”こと吉村秀雄。その壮絶でひたむきな男の人生には、文句ひとつ言わず陰から支え続けた妻の存在があった。吉村直江さん、92歳。吉村は生涯、彼女のことを『直江しやん』と呼んでいつも一緒に苦難を乗り越えた。夫から息子、そして孫へと半世紀にわたって引き継がれてきたヨシムラスピリッツ。吉村夫妻の生まれ故郷である九州でインタビューを行った。

取材・文／柳原三佳（ノンフィクション作家）

「お母さん、ほら見て、これ、お父さんの浴衣よ」娘は、少し耳が遠くなつた母をいたわるように、耳元でゆっくりと語りかける。「ああ、そうそう、これは昔、お父さんがよく着てた浴衣だわ……」

「このTシャツは、お父さんが

A MAに殿堂入りしたときの記念品。ここにお父さんの名前があるで

しょ。日本人では本田宗一郎さんとお父さんの二人だけなんですかね？」

「そう、そんな立派なところに選

んでいただけるなんて、本当にあり

がたいことね」

母は、懐かしそうに目を細め、T

シャツにプリントされた亡き夫の名

前を指でなぞる。

吉村直江さん（92歳）、森脇南海

子さん（71歳）。

母娘はこの日、大分県の湯布院に

あるバイク博物館『岩下コレクション』を訪れていた。展示場の一角に

設けられた『ヨシムラコーナー』に

は、ポップ吉村のサインや本人が

愛用していた浴衣、帽子やワッペ

ン、思い出の写真のほか、ヨシムラ

チューインのボンダCB77（305cc）

が展示されている。「Fukurok

a」という手書きの文字が残るテー

ルカウルは当時のままだ。

昨年の熊本大地震では、こ

「湯布

院も震度6の揺れを記録しきたが

見事に復旧を遂げた博物館に、新

シムラゆかりの品を岩下コレクショ

ンに提供。そして、震災から1年後、

見事に復旧を遂げた博物館に、新

シムラゆかりの品を岩下



'07年、鈴鹿8耐で27年ぶりの優勝を遂げ、表彰式に向かう陽平監督と不二雄総選監。陽平氏の腕の中で、ポップ吉村の微笑みんでいる。

生まれ変わつても「直江しやん」と
直江さんは語る。

「あのときは本当に嬉しかったですね。陽ちゃんを抱きしめて喜びました。でも決して本人だけの力でここまで来たではありません。親が早く亡くなつたぶん、辻本さん、竹中さん、浅川さん、大矢さんなど、多くの皆さんが愛情を持って育ててくださつたからこそ、今の陽ちゃんがあるのだ感謝しています」

第30回目の鈴鹿8時間耐久レースで優勝を果たしたときは、吉村「アミリー」が抱き合つて喜んだという。

「あのときは本当に嬉しかったですね。陽ちゃんを抱きしめて喜びました。でも決して本人だけの力でここまで来たではありません。親が早く亡くなつたぶん、辻本さん、竹中さん、浅川さん、大矢さんなど、多くの皆さんが愛情を持って育ててくださつたからこそ、今の陽ちゃんがあるのだ感謝しています」

生まれ変わつても「直江しやん」と
直江さんは語る。

「83年、アメリカから長男の不二雄氏が帰国。'85年からヨシムラは辻本聰、大島行弥で全日本ロードレースTT-F1クラスを3連覇に導いた。ホンダワークスを抑えての勝利は、世界中に衝撃を与える快挙、ヨシムラはまぎれもなく日本のトップ



父親の加藤昇平氏に抱かれる幼い頃の陽平氏。昇平氏がかぶっているのは幼稚園の帽子か？ その横に立つポップ吉村の表情はいつになく穏やかだ。

「火の中で呼吸はするな」というアメリカで再び「YOSHIMURA R&D」という会社を立ち上げたポップ吉村は、寝る時間も惜しくて朝まで起きて、寝る時間も惜しくて寝る時間がなかった。夫婦二人三脚での頑張りが、一度消えかけたヨシムラを蘇らせた。しかし、それから2年後、さらなる災難が襲つた。直江さんがパイプに砂を詰め、吉村がそれをガスで炎つて曲げる。一日最大50セット。計200本のパイプを曲げ続けた。この夫婦一人三脚での頑張りが、一度乗つて毎日30分以上かけ、病院へ通つた。ポップ吉村のやけどは酷く、痛みもあり、身体は動かせない。下の世話を含め身の回りの介護はすべて直江さんの役目だった。アメリカの病院食はまずくて食べられないという夫のために毎日みそ汁を作つてポットに入れ病院へ運び続けた。その甲斐申斐しい姿はアメリカの新聞に取り上げられたほどだ。

「アメリカは日本のように健康保険がないですが、幸いなことに二雄がちゃんと保険をかけてくれていたので助かりました。でも、このときはお父さんが精神的に落ち込んでしまって、一時はどうなることかと心配しましたね」(直江さん)

しかし、ポップ吉村はここでも再び見事に復活を遂げる。翌78年、デイトナ1000を4年連続で制覇。「4ストロークのチューニングといえばヨシムラ」という名前は世界中に広がっていた。

そしてこの年の夏、第1回鈴鹿8

モーターがショートし、これが何かに引火したのだろう。ポップ吉村はつさに、近くにあったガソリンタンクを抱えて、全身火だるまになりながら運び出した。大火だけは防がなければならぬ。必死だった。

「火の中で呼吸はするな」という予科練時代の教えを守つたおかげで肺は焼けず、幸い命に別状はないが、全身に大やけどを負い、長い入院生活を余儀なくされたのだ。

直江さんはこのときも自転車に乗つて毎日30分以上かけ、病院へ通つた。ポップ吉村のやけどは酷く、痛みもあり、身体は動かせない。下の世話を含め身の回りの介護はすべて直江さんの役目だった。アメリカの病院食はまずくて食べられないという夫のために毎日みそ汁を作つてポットに入れ病院へ運び続けた。その甲斐申斐しい姿はアメリカの新聞に取り上げられたほどだ。

「アメリカは日本のように健康保

険がないのですが、幸いなことに二雄がちゃんと保険をかけてくれていたので助かりました。でも、このときはお父さんが精神的に落ち込んでしまって、一時はどうなることかと心配しましたね」(直江さん)

しかし、ポップ吉村はここでも再び見事に復活を遂げる。翌78年、デ

イトナスパーーバイクを4年連続で制覇。「4ストロークのチューニングといえばヨシムラ」という名前は世界中に広がっていた。

そしてこの年の夏、第1回鈴鹿8

時間耐久レースにエントリーしたヨシムラは、ホンダを抑え、見事優勝を果たした。大企業のチームを抑え、小さなプライベートチームが頂点に上り詰める、その快挙はレースファンを熱狂させた。

最終周、涙のチエッカーフラッグが降られたその直後、アメリカにいる直江さんのものに優勝の快挙を知らせる国際電話が入つた。このとき直江さんは航空券が高くて買えず、ひとりアメリカで留守番をしていたのだ。鈴鹿の夜空に打ち上げられるエンディングの花火。真夏の祭典は大きな盛り上がりを見せていた。南海子さんはその日の喜びを直江さんと分かち合えなかつたことが今も残念でならないという。

アメリカへ進出してから、苦労の連続だった5年間。しかし、ヨシムラは完全な復活を遂げた。吉村秀雄56歳、直江54歳の夏だった。

悲しい別れを乗り越えて

会社の、そして家族の大きな危機を乗り越え、鈴鹿8耐を制したポップ吉村は、翌79年、再び日本に帰つてきた。少し前にスズキの設計者・横内悦男氏との運命的な出会いがあり、すでにGS750、GS1000をターボで4年連続で制覇。「4ストロークのチューニングといえばヨシムラ」という名前は世界中に広がつた。

そしてこの年の夏、第1回鈴鹿8

子さんの夫で、当時ヨシムラ・パ

オ父さんはものすごく責任を感じていました。俺のバイクで死なせてしまつたと……。あの時、俺はもう仕事をやめたい、会社もやめると本気で言つていましたからね。あれほど辛いことはなかつたと思います。昇平さん、あの人は本当にいい人だったんですよ」

しかし、ここで会社を辞めても、それは亡くなつた昇平さんが望まない。頑張つて続けてほしいと周囲から説得を受け、ポップ吉村はレースで支え、守つていこうと誓つたところです。昇平さん、あの人は本当にいい人だったんですよ」

「お父さんはものすごく責任を感じていました。俺のバイクで死なせてしまつたと……。あの時、俺はもう仕事をやめたい、会社もやめると本気で言つていましたからね。あれほど辛いことはなかつたと思います。昇平さん、あの人は本当にいい人だったんですよ」

直江さんは、今も悲しげな眼をしながら、涙を落としていた。陽平さんはその日の喜びを直江さんと分かち合つたことが今も残念でならないという。

アメリカへ進出してから、苦労の連続だった5年間。しかし、ヨシムラは完全な復活を遂げた。吉村秀雄56歳、直江54歳の夏だった。

悲しい別れを乗り越えて

会社の、そして家族の大きな危機を乗り越え、鈴鹿8耐を制したポップ吉村は、翌79年、再び日本に帰つてきた。少し前にスズキの設計者・横内悦男氏との運命的な出会いがあり、すでにGS750、GS1000をターボで4年連続で制覇。「4ストロークのチューニングといえばヨシムラ」という名前は世界中に広がつた。

そしてこの年の夏、第1回鈴鹿8

時間耐久レースにエントリーしたヨシムラは、ホンダを抑え、見事優勝を果たした。大企業のチームを抑え、小さなプライベートチームが頂点に上り詰める、その快挙はレースファンを熱狂させた。

最終周、涙のチエッカーフラッグが降られたその直後、アメリカにいる直江さんのものに優勝の快挙を知らせる国際電話が入つた。このとき直江さんは航空券が高くて買えず、ひとりアメリカで留守番をしていたのだ。鈴鹿の夜空に打ち上げられるエンディングの花火。真夏の祭典は大きな盛り上がりを見せていた。南海子さんはその日の喜びを直江さんと分かち合つたことが今も残念でならないという。

アメリカへ進出してから、苦労の連続だった5年間。しかし、ヨシムラは完全な復活を遂げた。吉村秀雄56歳、直江54歳の夏だった。

悲しい別れを乗り越えて

会社の、そして家族の大きな危機を乗り越え、鈴鹿8耐を制したポップ吉村は、翌79年、再び日本に帰つてきた。少し前にスズキの設計者・横内悦男氏との運命的な出会いがあり、すでにGS750、GS1000をターボで4年連続で制覇。「4ストロークのチューニングといえばヨシムラ」という名前は世界中に広がつた。

そしてこの年の夏、第1回鈴鹿8

時間耐久レースにエントリーしたヨシムラは、ホンダを抑え、見事優勝を果たした。大企業のチームを抑え、小さなプライベートチームが頂点に上り詰める、その快挙はレースファンを熱狂させた。

最終周、涙のチエッカーフラッグが降られたその直後、アメリカにいる直江さんのものに優勝の快挙を知らせる国際電話が入つた。このとき直江さんは航空券が高くて買えず、ひとりアメリカで留守番をしていたのだ。鈴鹿の夜空に打ち上げられるエンディングの花火。真夏の祭典は大きな盛り上がりを見せていた。南海子さんはその日の喜